



Title: 新たな気分で

❖ 更地になった隣接地に

大館市立中央図書館の南側隣接地が更地になりました。広いような、それほどでもないような……。建物が解体された当初は見晴らしが良くなるのでけっこう広く感じるのですが、ロープで建物予定部分の縄張りをしてみると、今度はなぜか狭く感じてしまいます。さて1年後、どんな姿を現すか、楽しみなような心配なような……。

ここで皆さんに報告したいのはそんなことではなく、4月6日の解体現場に突如出現したシュールなモノです。内も外もない更地の際に突っ立つ、孤独で、でもなぜか惹きつけられる、でもごくごく普通のアルミ製の、ドア。

このドアを見て真っ先に思い浮かべたのはもちろん、日本人なら誰でも知っている「どこでもドア」。夕暮れが近づく頃に見るこのドアは一抹の哀愁も帯びて、「ドラえもん！」と呼んでみたい気持ちに駆られます。大人だから呼ばないですが。

もうひとつ、久々に「超芸術トマソン」という言葉も思い出しました。こちらは知らない人もいるでしょう。一昨年亡くなった赤瀬川原平のグループが言いだしっぺで、実際の用に全く役立たないその純粋さが芸術的とさえ言える無用の長物のことです。南伸坊、松田哲夫、藤森照信に、荒俣宏、四方田犬彦、とり・みき、杉浦日向子(故人)等の豪華な面々と(シャレで)結成した路上観察学会は今も活動しているのでしょうか。

ここで図書館らしく、中央図書館所蔵の赤瀬川原平による路上観察関係の本を2冊紹介します。いずれも閉架にあるので、興味のある方は図書館員に尋ねてください。

① 赤瀬川原平ほか編『路上観察学入門』(筑摩書房、一九八六年)

請求記号は049/A

② 尾辻克彦/文、赤瀬川原平/絵『東京路上探検記』(筑摩書房、一九八六)

049/0

ちなみに尾辻克彦は赤瀬川原平が純文学を書くときのペンネームで、第84回の芥川賞受賞作家です、念のため。

ところでこのドア、本稿が載る4月8日にはなくなっているかもしれません。ここ、新設駐車場の入口になる予定なのです。庭に何気なくこんなドアが立っている図書館も面白そうですね。子どもたちは喜びそうだし。それはともかく図書館には本や雑誌などの形で世界が詰まっています。世界の外の世界だってあります。図書館自体も「どこでもドア」のひとつかもしれません。

❖ むいぐるみのおとまり会

個数はまちまちですが市内4図書館にはむいぐるみが住んでいます。たまにですが閉館後の図書館を見回る機会があったりします。そんな時、むいぐるみが転がっているのに気がついたりすると、けっこう気になります。自分で動いたんじゃないか? 前段最後の一文、ウソです、ごめんなさい。子どもの心には戻れません。

子どもたちへの読み聞かせを見ていると、子どもの物語に没入する能力ってすご

いと思います。ままごとやごっこ遊びなどでも、なりきっていますしね。大事にしているぬいぐるみは、本当にこころの友って感じだし。

ということで、中央図書館では子どもたちからぬいぐるみをひと晩預かって、「ぬいぐるみのおとまり会」を行います。夜の図書館で、おはなしを聞いたり遊んだり本を読んだり眠ったりするぬいぐるみたちの写真を撮り、帰りにお渡しします。

期日はGW明けの5月7日（土）の午後から明るる8日（日）の午後まで。先着12名様限り、ひとり1体だけです。対象は幼児から小学2年生までで、大館市立図書館の利用カードを持っていることを条件とします。なお参加料はなし、無料です。

参加申込みは明日4月9日（土）の9時30分から受け付けます。中央図書館の電話0186(42)2525、ファクシミリ(42)3329などでお申込みください。中央図書館カウンターでも受け付けます。締め切りは4月30日（土）ですが、定員に達し次第受付終了とさせていただきます。どうぞふるってご応募ください。

——おかげ様でこのコラムも3年目に入りました。いつまで新米司書を看板にしているのだという声も聞こえてくるので、今回からサブタイトルを変更しました。今年度も市立図書館と当コラムをよろしく願います。 （陽）